# 文化

# 先祖とたどるアイヌ史

◇曽々祖父開いた渡船場跡など訪問、本を出版◇

瀧口夕美

私の故郷は北海道釧路市、阿寒湖のほとりにあるアイヌコタン（アイヌ民族の集落）だ。1987年に全寮制の高校に入って家を離れるまで、15年間を過ごした。実家は集落に二十数軒あるみやげ物店の一つだった。観光客が増える夏休みには、接客を担当する母から「手伝って」という声がよくかかった。

私の通った小学校の1学年の人数は二十数人。うちアイヌコタンに住んでいるのは2、3人だったから、自分がほかの子どもたちと違うという意識は自然とあった。一方で、観光客から「純粋なアイヌはもういないんだよね」といった質問をされるたび、答えに窮した。

●●●

**「純粋」でない自分**

十勝・浦幌町愛牛出身のアイヌ民族の母、ユリ子（1941年生まれ）と、幼時に満州（現中国東北部）で聴覚を失い、彫刻家としての活動場所を求めて北海道に渡った和人の父、政満（41年生まれ）。純粋なアイヌでないとすれば、自分は何者なのか。教科書などでみるアイヌと、現代のアイヌである自分が結び付かず、悩んだ。

そして10年ほど前から、母や大叔父から話を聞くとともに、ゆかりの場所を訪れ、家族がたどった歴史を調べてきた。

私の曽々祖父にあたるのがアイヌ民族の長濱伊蔵（1872～1953年）。母にとって自慢の曽祖父だったらしく、「奥地に入植していく和人たちに、北海道での暮らし方について、いろいろなことを教えてあげたらしい」と私に語った。

●●●

**和人の風俗取り入れる**

49年刊行の「浦幌村五十年沿革史」に曽々祖父の名前を見つけた。「当村現存の最古者は恐らく長濱伊蔵氏であろう。同氏は現在七八歳で、一〇歳の時旅来（たびらい）から現住所〔愛牛〕に移住し今日に至っている」とある。

伊蔵への聞き書きも載っている。当時は、争いが生じると弁の立つ者同士が議論する「チャランケ」で解決したり、祭りではユカラ（叙事詩）を歌ったりする一方で、正月には餅をつき、葬式は仏式で挙げた。漁労・採集だけでなく、畑作でもかなりの収穫を上げ、馬を数多く飼っていた――。アイヌ民族と和人の風俗が混じり合い、両方を取り入れつつ暮らしていたことが分かる。

伊蔵が1898年に開いた十勝川の渡船場の跡も訪ねた。愛牛と対岸の旅来を結ぶもので、母によれば10人ほどが乗れる川舟のほか、馬を運ぶ船も行き来したという。この「愛牛タンネオタ渡船」は1992年まで運航していた。

伊蔵には子どもがいなかったので、甥（おい）でアイヌ民族の清蔵（1904～71年）が養子となる。母にとっては祖父に当たり、母は清蔵をオジジと呼ぶ。母の両親は結核で若くして死んだため、オジジが親代わりとなって厳しく育てた。地元の漁協に参加し、漁業をなりわいとした。

浦幌の母の実家には、酪農を営む大叔父が住んでいる。オジジの養子で和人だ。話を聞くと、伊蔵やオジジはほかのアイヌが来たときはアイヌ語で話すことはあったが、家の中ではほとんど使わなかったという。

●●●

**曽祖父が残したテープ**

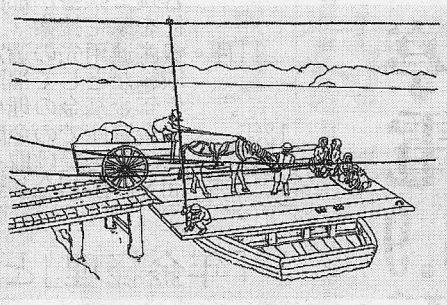
母は21歳で阿寒湖畔に移り、3年後に父と結婚する。オジジとの折り合いはあまり良くなかった母だが、オジジのトゥイタク（散文体で語られる物語）を録音したテープはとても大切にしていた。いつも私に「火事になったらこれだけは持って逃げてほしい」と言っていた。

「オジジがいなくなったら、私はアイヌ・プリ（アイヌ民族の慣習）も知らないし、アイヌ語も残らないね」と母が言ったら、オジジは涙をこぼしながら「教えたい」と録音に同意したそうだ。

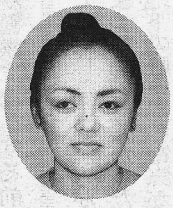
オジジが残したのは毒矢に当たって死んだ熊の神様の物語。人間たちがイオマンテ（熊を神の国に送り返す儀式）を粗雑に執り行うので、熊の神様が怒っていると、別の神様たちからおまえの性根が駄目だからだと逆にさとされ、ついに悔い改めるという内容だ。一生を漁師として過ごしたオジジのなかに、アイヌ語が生き生きと存在していた。アイヌ語の物語を身内がこのように録音したケースは珍しいらしい。

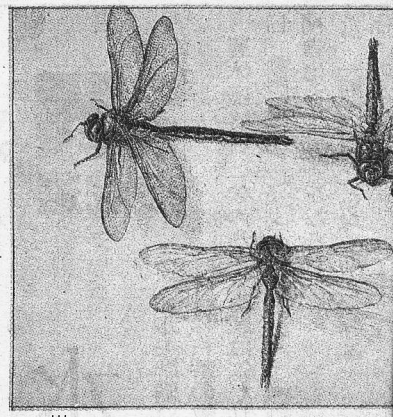
こうした先祖の足跡を訪ねる旅は「民族衣装を着なかったアイヌ」という本にまとめた。「編集グループSURE」で直接販売している。

暮らしぶりが日本化して、民族衣装を着ていなくても、母にとってオジジのテープがそうであったように、それぞれの人が大事にしているものの中に、アイヌらしさは残りつづけている。それは現代のアイヌである私のなかにもひきつがれているのだと思う。（たきぐち・ゆみ＝編集者）



筆者の母が描いた馬船の絵





ジャック・ド・ヘイン2世「トンボの3

や同定ができるほど正確なものだと分かる。

よく見ると、トンボに当たっている光の方向や身体の構造がはっきりと読み取れる。また、細かく気の配られた繊細なペンのストロークが、質感

って描いたように精密だが、この時代はまだ顕微鏡が発明されて10年ほどしかたっていない。（1600年、インク、紙、15・2×18・9センチ、メディア&ジョージ・アブラムス・コレクション）

## チクリン対決

朝日新聞社に主催が移って初めてとの名人戦二番勝負の兆

たが、タイトル戦での対決は初めてだった。年齢はともに35歳。その年になり、ようやく私が林さんの活躍に追いつ

空回りしてしまうのだ。

実際、4連敗したとほいえ調子を崩していたわけではない。翌年の第3期は名人リー

だ。碁はお互いの囲った地の広さを争うゲーム。自分の打った石を捨てるというのは、その分、相手の地が増えることになり、自先約こは負にな

ンのタイトル戦は1勝1敗の痛み分けとなっている。

私の名人リーグ在籍は、名人を保持していた4期を含め24期に及ぶ。名人リーグは9

## 交遊抄

### 「江戸半会」

祐治岩

我が母校、神戸の灘高校の同期が2カ月に1度、集まる勉強会がある。店の名を取って「江戸半会」。30年近くも続いているのは、幹事役をずっと引き受けてくれた高木繁君のおかげである。

彼は慶大医学部卒の精神科医だが、学生時代に始めた副業でも大成功し、今や趣味の会でもある。男子校であるだけに高木夫人で女優のあいはら友子さんが折々に駆けつけ、盛り上げてくれるのはうれしい。

残念ながら最近、同期に訃報が相次ぐ。衆院議員の西田猛君、無二の親友だった弁護士の中島健仁君、ノーベル賞を目指していた医師の西本征夫君ら、225人の同期のうちすでに15人が鬼籍に入ってしまった。